

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

母系社会のしくみ：
土方久功が住んだ50年後のサタワル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009330

母系社会のしくみ——土方久功が住んだ50年後のサタワル

須藤 健一

国立民族学博物館長

はじめに

I. サタワル社会の母系クラン

1. 移住伝承と社会・政治的地位
2. クランの階層性と特権

II. 母系クランの人口動態と構成原理

1. 1908年からの人口と居住地の変化
2. 首長権の継承とクランの存続戦略

III. 母系クランの属性と機能

1. 伝統的知識の共有体
2. 島間の親族紐帯と安全保障

おわりに

はじめに

パラオにわたった1929年4月19日から2年半、土方久功は先史遺跡や島の神話・伝説、民族学的な調査、パラオ支庁の嘱託として公学校を巡回して島の子どもたちへの美術（板彫り）指導、そして自らの創作活動を行っていた。1930年代になると多くの日本人がパラオに進出し、パラオ人とパラオ社会が日本化するのを実感した土方は、パラオ脱出を計画する。

「私の唯一の、無二の目的は最も文明の影響の少ない、島民らが昔ながらの生活を続けているところ」[土方1943:24]への移住である。土方はパラオのカヤンゲル環礁で偶然出会ったサタワル島の男、オジャレブルの語る孤島の話に強い興味を抱くことになる。オジャレブルは、アンガウルのリン鉱石採掘人夫として南洋庁から強制雇用され、3年の任期を終えても島に帰らずにパラオで無為に暮らしていたのである。そして、1931年9月21日に長明丸でパラオを離れた。その船は、年4回程度パラオを母港にヤップとその離島を回る100トンの機帆船である。

パラオを出てヤップ島とその8つの離島を巡って17日目の10月8日、土方は弟子の大工さん（杉浦佐助）とともに、オジャレブルに導かれてサタワルに着く[須藤・清水2011:528]。それから、1938年12月末までの7年間、「この小さな島に、裸ン坊の島民たちの中に暮らすことになったのだ。」と、土方は『流木』のサタワル島への旅の中で書いている[土方1943:22]。

土方が住んだサタワル島は現在、ミクロネシア連邦ヤップ州に属している。日本が統治した旧南洋群島は1947年に国連の信託統治領となり、アメリカ合衆国に支配された。日本統治時代のヤップ、トラック（現在チューク）、ポナベ（現在ボンベイ）の3支庁の島々は、1986年にミクロネシア連邦の名のもとに独立した。マーシャルはマーシャル

諸島共和国として1986年に、パラオはパラオ共和国として1994年にそれぞれ独立した。また、サイパンはテニアン、ロタなどの島々と北マリアナ諸島コモンウェルスとして、1978年にアメリカの自治領になった。このように、小さい島々からなる旧南洋群島はアメリカとの自由連合協定による3つの独立国と1つの自治領に分裂したのである。

サタワルの人びとは、2007年の調査によるとサタワル島に約500人、州都のヤップ島に290人、ミクロネシア連邦の首都パリキールのあるポーンペイに20人が住んでいる。そのほか、グアムに80人、サイパンに30名、ハワイなどアメリカ合衆国に約20人が住んでいる。アメリカ合衆国に居住できるのは、ミクロネシア連邦がアメリカと自由連合協定を結んでおり、居住と就労と移動の自由が認められているからである。

土方久功が調査に入った1931年のサタワル島には286人が住んでいたから、島人口は今日までの80年間で約2.6倍に増えたことになる。筆者が調査を行った1980年の島人口は500人であったから、現在とほぼ同じであるが、島外居住者が450人と増大している。島外移住の主な理由は、政府の公務員、観光業、建設業、サービス業などに従事し、自らの家族の扶養とともに島の家族・親族への経済的支援のためである。

アメリカ統治時代には島に小学校、診療所、無線所が設置され、1953年からは首長の指示でカトリックに集団改宗し、教会も建てられた。1970年代からは、船外機付きのボートが導入されてトローリングなどの漁労活動に使用されている。島の人びとの生活に直結する州都への連絡船サービスは、年に6回程度と改善されている。筆者は1978年6月に石森秀三さん（現北海道大学観光学高等研究センター長）とサタワルに予備調査に入った。そのとき乗船した船は、日本が戦争賠償として贈った500トンの貨客船、マイクロスピリット号で、その処女航海であった。2008年からは、中国の援助で新造船が就航している。

一方、家屋もココヤシの葉やトタンの屋根だけでなく、現在はコンクリート製のものまで建設されているという。一方、大型カヌーでのサイパンやプルワットなどほかの島への航海や無人島への漁労活動は依然として行われている。船外機付きのボートを導入しても、カヌーの建造技術と伝統的航海術は継承され、実際に使われている。また、バナナやオオハマボウの内皮から糸をつむいで腰機で布を織る技術も維持されている。現在、島の人びとの生活は土方の住んだ時代とは大きく変わっているが、島社会の組織と基本となる営みは維持されているようである。

本稿では、土方が滞在した1930年代と筆者が調査を行った1978年から80年にかけてのサタワルの人びとの行動を律する人間・社会関係を中心に、親族集団と社会組織の持続と変化について記述することを目的とする。須藤の資料は須藤〔1985：838-865〕に依拠するが、記述内容は大幅に修正されている。ミクロネシア諸語、トラック語系に属すサタワル語の音声表記は、須藤・Sauchomal〔1981：656〕に準拠する。

I. サタワル社会の母系クラン

土方は、サタワルで生活を始めて1年後、1932（昭和7）年9月14日の日記に「女系氏族」について次のように記述している。

この島はなにぶん小さな島であり、全人口にしてわずか300人に足りない少数であるから、氏族も極めて簡単でかつはっきりしている。——中略——まずこの女系氏族のことをヤイナンというが、ヤイナンには島の酋長を出すヤイナンギ・ニ・サモヌ（酋長氏族）と、酋長を出すことのないヤイナンギ・ニ・アラマス（平民氏族——アラマスは人間の意）とがあり、ヤイナンギ・ニ・サモヌは次の三氏で順位が定まっている。

第一氏、ネーヤジ。第二氏、エアナティウ（原名サファナジク）。第三氏、ノーソマル。

第一のネーヤジ氏のサモヌ（酋長＝族長）が島の第一サモヌ（酋長）となり、第二のエアナティウ氏が島の第二サモヌとなり、第三のノーソマル氏のサモヌが島の第三のサモヌになるのである。エアナティウ氏は西方のサウファナジク氏で、この島でもその原名が忘れられてはいないのであるが、普通にはその居住地区の名をもってエアナティウ氏と呼ばれるのである。アラマス氏族には順位がなく、次の五族がある。サウサット氏。マーサノエ氏。カタマン氏。サウエン氏。ピーク氏。[土方1943：308-309]。

本章では、サタワル社会で人びとの生存と社会生活の基本となる親族集団、土方のいう「女系氏族」の歴史伝承と政治的地位などについて述べることにする。

筆者が調査を行った1980年当時のサタワルには、土方の滞在時と同じく8つの固有名称をもったアイナン（*yáinang*）とよばれる母系出自集団があった。土方はアイナンをヤイナンと記して「女系氏族」の用語を当てているが、本稿ではアイナンと表記し、社会人類学の用語である「母系クラン」、ないしは「母系出自集団」の語を当てることにする¹⁾。まず、サタワル社会の人口動態と親族集団の構造について記述する。

1. 移住伝承と社会・政治的地位

土方が住んだ1930年代と同様、1980年当時、サタワルには8つの母系クラン（以後、クランと略記する場合もある）が存在している。人びとはそのうちどれか1つに帰属することによってのみ、島社会での生活が可能になる。母系クランの名称は、(1)ネヤール（Neyáár）、(2)アーナティウ（Yáánatiw）、(3)ノーソマル（Noosomwar）、(4)カタマン（Kataman）、(5)ピーク（Piik）、(6)サウエン（Sawén）、(7)サウサット（Sawsát）、(8)マーサノエ（Maasané）である。それらのうち、(1)～(3)の名称は、いずれもサタワル島の地名に由来している。その理由は、それら3クランの先祖がその土地をきり開いて居住地としたからである。その土地はかならずしもクランを創設した開祖が住んでいた場所ではないが、少なくとも5～6世代前の先祖が占居したところである。

それにたいし、(4)～(8)のクラン名称は、サタワル島の地名にちなんだものでなく、中央カロリンやチューク(旧トラック)の島々に分布するクラン名称と共通している(表1参照)。(1)～(3)のサタワルの地名を冠するクランも、他島のクランとの関係においては、それらの島々に共通する名称をもっている。(1)Neyáárは、アトノヨン(Yatonoyong)、(2)Yáánatiwは、土方も指摘しているようにサウファナチク(Saufanachik)ともよばれる。また、Yáánatiwは、(3)Noosomwarとともにモゴヌファル(Mongonufarh)ともよばれる。(2)と(3)が同一の名称をもつのは、サタワル島へ移住前に、サタワル西方のイファリク(Ifalik)島で1つの母系出自集団(クラン)を構成していたからである。そして、イファリク島から他島への移住の過程で2つの独立した集団になり、それぞれが時期を違えてサタワル島に渡来したのである²⁾。したがって、サタワル島に定住したときから、元来はクランの名称を同じくするが、別個の出自集団を形成している。

土方はこの島には「昔話」はたくさんあるが、それは歴史的な色彩がほとんどないと述べた後で次のように記している。「島民間には自分達の歴史に関心を持つということが殆どないので、七年もの長い間に、私は島民達から何らの歴史的事実を引き出すことはできなかった」[土方1984:21]。この背景には、死者の名をよんだり、死者を思わせるような話を極度に慎むという観念があり、系図や一族の系譜などを知っているものに出会わなかったとも語っている。

筆者も調査の当初は母系クランの系譜は一族の「秘密の知識」で部外者には教えられないといわれていた。しかし、数か月後から「秘密の知識」を継承してきた高齢の女性から、自分の一族の歴史には若者が関心を示さず、忘れ去られるので「紙に書き残したい」という希望がでて、筆者は母系クランのラピトともよばれる起源譚を記録することができた。

8つの母系クランはそれぞれ、起源地とサタワル島までの移住経路を伝える口頭伝承をもっている。これはラピト(*rapito*)、つまり「(クランの)来住の根幹となる伝承」とよばれ、クラン成員外に伝授することが禁じられる。各クランのラピトで語られるクランの起源地と移住経路を示すと表2のようになる。そのうち(1)Neyáár、(2)Yáánatiw、(3)Noosomwarと(7)Sawsátの各クランの起源地は、いずれもサタワルから1500kmも東方のコスラエ(Kosrae、旧名Kusaie)島である³⁾。それらはサタワル島へ移住した時期がほかの4つのクランよりも古いといわれる。そして、島への移住伝承が、クラン間の政治的序列を決定する重要な要因となっている。

ラピトによると、サタワル島へ最初に移住したクランは(7)Sawsátである⁴⁾。そこで、Sawsátクランのサタワル島への移住と島づくりの口頭伝承に基づいて、サタワル島のクランの関係とそれらの政治・社会的序列を明らかにしてみたい。

Sawsátは「海の人」ないし「サタワルの人」という意味である。サウ(*saw*)は「人」

を意味するが、とくにすぐれた知識や技術を修得している人をさす。また、*saw* は「本幹」とか「元祖」という意味もある。そして、サット (*sát*) は「海」を表すと同時に、Satawal の *sat* を指示するともいわれる。したがって、Sawsát は「海を支配する人」ないしは「サタワル島の元祖」とも訳せる。Sawsát クランの先祖はサタワル島の東隣り、300km 離れたプルワット (Puluwat) 島から移住してきた。そのとき、カヌーできた人は4人の男性と7人の女性であった。彼・彼女らが島に上陸してみると無人島であり、11人の新参者は礁湖の水路がある場所に住んだ。それから、各人は島の主要な土地に分住し、外部からの侵入者を見張ることになった。彼・彼女らは「島を見張る人」としてそれぞれの役割をうけもった⁵⁾。

Sawsát の男たちは西隣り 100km にあるラモトレク (Lamotrek) 島へ航海した。その航海によって、ラモトレク島がサタワル島を支配する島、つまりサタワル島のサモン「首長」を出す島であることを知ったのである。それで、彼らはサタワル島の首長になる母系クランの人びとをラモトレク島から招聘した。Sawsát の人びとはラモトレクからの最初の移住者であるアトノヨン (Yatonoyong) クランの人びとに島の南部の土地を分与した。この人びとが現在の Neyáár クランの祖先である。Neyáár の語義は「ヤールの木の下に (住む人)」である。そして、Sawsát クランの年長男性と Neyáár クランの女性から1人の男が生まれた。その息子は、父に従順で父の面倒をよくみたので、Sawsát クランの人びとは、彼にサタワル島の南部を統治する権限を譲渡した。その結果、Neyáár クランの男性がサタワル島の最初の「首長」になった。

Neyáár クランのつぎにラモトレク島から Mongonufarh クランの人びとが来島した。それで、Sawsát クランの族長 (*tenap*) は、彼・彼女らに島の北部に住むように指示して土地を分けてやった。その人びとが現在の Yáánatiw クランの祖先である。Yáánatiw は「休憩する場所」の意味。そして、3番目に来島した人びとも、ラモトレクの母系クランの人びとであったが、彼らは Yáánatiw クランとは系統を異にする Mongonufarh クランに属していた。そのために、Sawsát クランの人びとは、彼・彼女らに自分たちの居住地であった島の中央部の土地を譲渡した。3番目にきた Mongonufarh クランの人びとが、現在の Noosomwar クランの開祖となり、Neyáár クランと Yáánatiw クランの間にある地域を統轄することになった⁶⁾。このようにして、サタワル島の最初の住人であった Sawsát クランの人びとは、「首長の島」(ラモトレク島)からの移住者に土地を分け、サタワルの統治権を譲った。その後、Sawsát クランは Neyáár クランの配下として島の南部に住んだ。その結果、サタワル島は、南、中央、北の3地区(村)に分割され、4つの母系クランが共存する時代が長く続いた。

そのあとサタワル島には、9つのクランが移住してきたが、現存するのは、Kataman, Piik, Sawén と Maasané の4クランである。Kataman と Piik は、島の北部に住む Yáánatiw から居住地を分与されて島で生活するようになった。Sawén は Noosomwar

に養取の形でくみこまれ、Maasané は Neyáár の監督のもとに島入りし、それぞれから土地を譲りうけて独立した母系クランとしてこの島に住むようになった。

以上が、Sawsát クランのラピトが語る 8 クランの移住伝承である。この伝承によると、サタワル島は、Sawsát クランの人びとが来島する前は無人島で、ラモトレク島の領有する島であったことが示唆されている。

このサタワル島とラモトレク島との関係は、現在においても、ラモトレク島がカヌーの船体、サタワル島が風下側の荷台、ラモトレク島の西にあるエラート (Elato) 島が腕木にたとえられ、主島と属島という政治的地位にある。1950 年代まで、サタワルの人びとは 1 年に 1 度、ココヤシの実と貯蔵したパンノキの実をラモトレクに貢納していた。また、エラート島はアオウミガメをラモトレク島に贈っていた。これは、「つり針航海」とよばれ、2 つの属島がラモトレク島のつり針によって自由に釣りあげられることを意味している。この貢納航海は、サタワル島を代表する首長クランがラモトレク島の母系クランに出自しており、かつサタワルの人びとがラモトレク島の領土である無人島の資源利用を許されていることに基づいている⁷⁾。この関係は、母系クランの序列にも反映しており、主島であるラモトレクから早期に移住してきた 3 クランが、サタワル島を政治・社会的に統治する首長を輩出し、「首長クラン」とよばれている。そして、来島の順序にしたがって、土方が指摘した順位のとおり、Neyáár クランがサタワル島の第一位の首長をだすクラン、第二位が Yáánatiw, 第三位が Noosomwar ということになる。

首長クランよりあとに、サタワル島へ移住してきたクランは、「平民クラン」とみなされている。平民クランは、前述したように 3 首長クランの庇護のもとに土地を分与されたと語られている。そのために、土地の贈与集団と受贈集団とのあいだに、社会的地位の格差が生じ、後者は前者の「言うことをよくきくひと」(yakkuné) といわれている。あるいは、それら 2 集団間関係は「お互いに知っているあいだから」(kuney fengan) ともいう。つまり、Maasané は Neyáár, Kataman と Piik は Yáánatiw, Sawén は Noosomwar のそれぞれの従属クランになるのである。そして、主-従関係にある 2 集団においては、従属的地位にある母系クランが、保護者の立場にある母系クランのカヌー、カヌー収納庫兼集会所 (以後、カヌー小屋と表記) の建造や修復などの機会に労働力を提供する義務がある。このような母系クラン間の主-従関係は、島社会のレベルでは、首長クランと平民クランという名称で表現され、階層差として認識される。そして、首長クランの族長はサモーンとよばれるのにたいし、平民クランのそれはテナップとよばれ、名称を異にする。

2. クランの階層性と特権

土方も指摘しているように、8 つの母系クランは、3 つの「酋長氏族」つまり「首長クラン」と 5 つの「平民氏族」つまり「平民クラン」とに階層化している。首長クランの

あいだでも1位から3位までの序列があり、平民クランでありながらもサタワル島の「元祖」という地位を占めているクランもある。

首長クランと平民クランとの社会的地位差は、まず集会における発言権のちがいにあらわれる。サタワル社会の集会は、成人男性によって構成される。島全体にかかわる問題が生じた場合には、首長クランの首長3人、それぞれの次期首長候補者3人と平民クランではあるが、「サタワル島の最初の人」である Sawsát クランの族長の計7人で会合をもち検討する。そこでの合意事項が、島の成人男性の全員参加の場となるカヌー小屋で伝達される。その集会には島の中央部のカヌー小屋が使用される。それは、間口12 m、奥行き20 mの大きさがある。集会で話しをするのは最年長の次期首長であり、彼が司会役もつとめる。首長の合意事項の通達にたいして、質問ないし反対意見を述べるのが許されるのは、首長クランの男性成員と平民クランの族長だけである。つまり、平民クラン成員の族長でない男性は、何ら発言する権利をもっていないのである。平民クランの出身者で、偉大な航海者、伝統的知識を修得している長老であっても、集会で自分から意見を述べることは、「道をとおさない男」とみなされ、批難をあびることになる。

政治的的局面にかぎらず、儀礼的場面でも、首長クランと平民クランとのあいだにはちがいがみられる。人生儀礼においては、1950年代までは子どもの誕生前後に、産婦と新生児が産小屋に滞在したが、その日数は首長クランの成員の方が平民クランのそれよりも長い。そして、産婦が家に帰ってからも、首長クランの場合は、その家の外側に禁域を設定し、そこで子どもの水浴をさせる。これは、平民クランの人に「子どもの頭をふみつけられる」のを忌避するからと説明される。初潮儀礼においても、初月経をみた首長クランの少女は、頭を新しい腰布でおおって月経小屋に入る。

また、葬送儀礼では、死者のでたサモーン（首長）クランの家へは、首長の指示で男性がココヤシ、女性がタロイモ料理を贈る。また、その家の周囲の木に登ることや物を頭上にのせて運ぶことが禁じられる。埋葬後、さらに一定期間の「労働の禁止」がともなう。この首長クランの葬送儀礼について土方は、1932年1月2日の日記に次のように記している。

死人がサモーン酋長氏族のものであるならば、埋葬の翌日、村中の男が一人十個ずつのニュ（椰子の若実）を死人のあった家を持って行く。これはその家の女長が各氏に適当に分配して残りをそのまま自分たちでとる。そして翌日は、今度は村中の女たちが全部芋田に出て食物をとってきて、一人が一鍋または一皿ずつ食物を作って、死人のあった家へ持って行く。これもまた家の女長が各氏に適当に分配して、あとは自分たちのものとするのである。

そして原則としては、サモーン氏族のものが死んだときは、四晩のエビヌ・エガン（労働禁忌：筆者記）が伴うのである。——（中略）——なお、このサモーン氏族の者が死んだ時には、ウォニ・ファイといって一般に喪のごとき一種のエビヌ（禁忌：筆者記）が守られるので、それは普通にエビヌ・トエタ・エイ・ナン（高登りの禁）といわれ、その死人の家の付近で高い所、椰子の木とか屋根等に上がってはならず、その付近では大声を出したり、高

い音を立ててはならないのである。また、その付近ではモノを高く差し上げて歩いたり、肩にかついで通ったりしてはならないのである。[土方 1943 : 124 ; 須藤・清水 2011 : 556]。

この記述から、首長クランの葬送儀礼の直後には、食べ物の贈与と再分配、首長クラン成員への敬意行動などが規範となっていることがうかがえる。この慣行は、1980年においても遵守されていた。さらに、首長クラン成員の死にかぎって、死後1年以内に盛大な食物の集積と分配が伴う追善儀礼 (*farik*) も催されている [須藤 1989a : 211-212]。

このように、首長クラン成員と平民クラン成員のあいだには、宗教的観念のうえでも、差異が存在する⁸⁾。しかし、日常的な対人行動や生産活動においては、階層差ないし身分差はあらわれない。平民クランの成員が首長クランの成員にたいして表敬行動を義務づけられるとか、平民クランの成員が首長クランのために食料生産に従事することはない。また、序列化した3首長クランに帰属する人びとのあいだには、行動面において何ら区別がない。同様に、それらの首長間には、権限行使の点においても格差が存在しない。3人の首長は、職務を分担しており、島の資源管理、海と無人島の資源利用、そして島社会の秩序維持の3分野に関して、それぞれの首長が責任をもっている。それらの職務は、数年ごとのもちまわり制である。

現在の国家体制のもとでは、それらの役割のほかに、年2度開催の「離島首長会議」や州政府の行政連絡や会議に出席するための島代表としてのポストがある。首長会議には、長老の首長が出席するが、行政連絡の職につく人は、首長クランの成員のなかから3人の首長によって指命されている。また、州議会議員の立候補者の選定も3人の首長によって行われる。このように、首長クランの成員間および首長のあいだには、移住伝承に依拠した序列化は顕在化していない。

他方、第一位の首長である *Neyáár* クランの首長は、島の人びとから、食べものの献上をうける権利がある。その献上物は、パンノキの実の初収穫物とココヤシの葉柄の新芽から採取する液汁である。前者は「初めてのパンノキの実」、後者は「最初のココヤシの液汁」である。パンノキの実の献上は、それが豊作の年で1軒あたり1籠(8~10個)、ココヤシの液汁のそれは成人男性1人あたりびん1本(720ml)である。*Neyáár* クランの首長は、それらの一部をとったあとで残りを島の人びとに再分配する。この初物儀礼は、献上するパンノキの実とココヤシの液汁の数量からもうかがえるように、第一位の首長がそれらの贈与によって「富を蓄積する」といった性格のものではない。

これは、キリスト教の受容前に、第一位の首長がパンノキの豊穡を祈願する儀礼を主催する権限をもっていたこととも関連している。*Neyáár* クランの首長は、パンノキが新しい実をつける時期(1~2月)に、その年のパンノキの実の豊不作を占い、パンノキの実の豊穡を増進する「パンノキの専門家」に儀礼を催すように指示する。この儀礼が終わらないと、人びとはパンノキの実を採取して食べる事が許されなかった。初物

献上儀礼は、タロイモとならんでパンノキの実に食料資源を依存しているサタワルの人びとにとって、重要な意味をもっていた。

島の長老は、Neyáár クランが島の最初の統治者 (*namenam*) であるから、この儀礼を行うのだと説明する。それは、Neyáár クランが、島の食料資源を統制する権限を保持していることを示唆しているのである。つまり、初収穫物を第一首長に献上するのは、その首長が島の食料資源を管理、統制する最高責任者であるという役割と密接に結びついているのである。とくに、パンノキの実は、年中収穫が可能なタロイモと異なり6月～9月の季節的収穫物であり、また年間の雨量などによって豊不作が生じるために、超自然的存在の加護のもとに栽培されるという特徴がある。これは、呪術・宗教的力を統御する司祭者にたいして儀礼実修の責任をもつ首長への「謝礼」とみなすことができる。

最後に、サタワル島の草分けである Sawsát クランがもつ特権について述べることにしよう。そのクランの族長が、島の首長会議のメンバーであることは前述した。そのほかに、サタワルの男たちは Sawsát クランの族長に、アオウミガメの頭部を献上することが義務づけられている。ウミガメは、サタワルの人びとにとって、動物性タンパク源として魚介類とならんで重要な食物である。しかし、この島でベッコウガメやアオウミガメを捕えるときつい禁忌がともなう。

土方はその禁忌事項について、「マウ（鼈甲亀）を捕えたものは月が二つ変わるまでのあいだ海岸の砂浜に起居して穢れをはらわなければならない。その間は、断じて集落にでて来てもならないし、食物も一般の村人と別の火で調理されなければならない」と書いている [土方 1943 : 37]。同様にウォン（正覚坊亀：アオウミガメ）を食べたものや触れたものは、1か月のあいだ森や湿地へ行ってはならない。このような禁忌は、1980年当時には廃止されていたが、サタワル島で捕れたカメ類を食すことは禁忌とされていた。そのため、島の男たちは首長の許可をえて100 km 離れたウエスト・ファーフ（ブケーノ）やピークなどの無人島へウミガメとりの航海にでかける。ウミガメが産卵のために無人島へ上陸するときや無人島の海域を遊泳しているのを捕える。産卵の最盛期（5月～7月）には、1航海数ぞうのカヌーで10頭ものウミガメがサタワル島に運ばれる。また、島の周辺海域で海象が悪化し、漁労活動が不可能になる11月から翌年の2月までの期間は、このウミガメが貴重な動物性タンパク源となる。

ウミガメがサタワル島に陸揚げされると、その料理、解体、分配は、「海の首長」ないし Sawsát クランの族長の指揮のもとに行われる。そして、胴体部の各部分の肉、血、卵などは島の人びとに均等に分配される。しかし、ウミガメの首より上部は、かならず Sawsát クランの族長に献上される。これは、「海の食料資源」でもっとも大事なウミガメは、サタワル島の「最初の人」である Sawsát クランのものであるから、と説明される⁹⁾。つまり、この贈与行為は、ウミガメに代表される海の漁業資源にたいして、平民クランではあるが、サタワル島への最初の定住者とみなされている Sawsát クランが、特

別の権限を保持することを表しているのである。

また、サタワル島で漁獲される魚類のなかで特定のものは、3人の首長に贈る慣行もある。その魚は、スジアラ、大型のマグロ、メガネモチノウオなどで数年に1度ぐらいしか捕獲されない。首長の魚といわれる理由は、それらの魚はいずれも、その遊泳する様や海中の動きが優雅でおっとりとしているので、首長に期待される立ち居振る舞いや行動と類似しているとみなされるからである。よって、それらの魚は「首長」にたとえられ、「首長」の象徴であるから、平民クランの人びとは食べてはいけないといわれる [秋道 1981 : 108-109]。

以上で首長クランと平民クランの階層差、首長クラン間の序列およびサタワルの草分けクランである Sawsát クランの特権などについて述べてきた。サタワル社会において、クラン間の社会的地位差は、集会での発言権、儀礼場面、そして特定の物の献上などにおいて顕在化する。このような、社会階層は、「歴史的伝承」に基づいて、先住者と新参者、土地の保有者と非保有者という二者間関係によって成立したとみなすことができる。しかし、その差は日常的な対人関係においては表敬行動、貢納制度においては「富の蓄積」へと発展するような性格の贈与ではない。

首長クランの首長であっても、島の1人の「男」として、漁労活動、ココヤシ林の手入れやパンノキの実の採取などの諸活動に従事する。サタワル社会は、3人の首長によって社会・政治的には統率されているが、その統制権は島の人びとの生活を保護し、保障するために行使されるのであり、首長の個人的ないし首長クランの利益を優先させるために企図されることはない。したがって、サタワルの首長は、食料資源の管理、その有効な利用と均等な分配を促進することを第一義の役割があるといえる [須藤 1984 : 287-303]。

II. 母系クランの人口動態と構成原理

土方は1931年の島の状況について次のように書いている。

島の大きさは正確にはかったわけではないが、——（中略）—— 総面積にして100町歩内外であろう。さてこのような小さな島に、どのくらいの間人が、どんな風に住んでいるかというに、私が島に入って間もなく1931年11月に調べた当時、メサール（島の西海岸：筆者記）に44軒の家（yim イム）があり——ほかに3軒の無住の家があった——、男子134人、女子149人、総数283人、このうち夫婦ものが57組であった。ただし、そのうちパラオ、アンガウル等に人夫に出ているもの、ヤップ、ポノワット等にわたっていて不在のもの、男子33名、女子5名の38名であったから、現在数は男101人、女144人、合計245人であったが [土方 1984 : 12-13]。

この記述から、男性は南洋庁によるアンガウルのリン鉱石採掘やパラオでの仕事、さらには他島の女性との結婚などで、若者の3割が島外へ出ていることがわかる。島は孤立した状態ではなく、つねにはほかの世界と関係を維持して島の生活を成り立たせていることがうかがえる。

本章では、サタワルの母系クラン（出自集団）の内的構造と分節の過程を中心に述べることにしよう。まず、1909年～80年の70年間における母系クラン成員の人口変化を比較する。1909年の資料はドイツのハンブルグ探検隊の報告〔DAMM und SARFERT 1935：132-137〕、1931年のそれは土方資料〔土方 1984：37-38〕、そして1980年の資料は筆者の調査〔須藤 1984：1985〕をそれぞれ利用する（表3）¹⁰⁾。

1. 1908年からの人口と居住地の変化

1909年、1931年そして1980年の島の人口と家数および建物などの数はおおよそ次のとおりである。

1909年には、家数33軒、カヌー小屋7軒、月経・産小屋2軒、人口は男性104人、女性84人の計188人、夫婦50組である。

1931年では、家数47軒、カヌー小屋7軒、月経・産小屋2軒、人口は男性132人、女性139人の計271人、夫婦57組（土方の前述の人口の方が多いのは、サタワルの母系クランに属さない他島からの滞在者がいるからである）。

1980年は、家数86軒、カヌー小屋8軒、月経・産小屋0軒、人口は男性262人、女性230人の計492人、夫婦111組である。

この70年間、人口が2.6倍に、夫婦数が2.2倍にそれぞれ増加している。とくに、女性人口が男性人口に比して少ないこと、1953年のキリスト教（カトリック）への集団改宗により月経・産小屋が廃止されたことが目につく。

表3に基づいて母系クランの成員数をくらべると、1980年において、最多成員数のクランはNoosomwarで111人、最少成員数のそれはPiikの13人である。しかし、島人口の半数を占めているようなクランは存在しないことがわかる。一方、3首長クランは、成員数において平民クランを圧倒していることがうかがえる。また、1909年から1980年の各クランの成員の変化をみるとYáánatiwクランをのぞけば、他の2首長クランは、安定した成員人口をようしている。Yáánatiwの場合、ドイツの資料では女性人口が不明であるが、筆者の調査資料では1909年当時5～6人居住していたことが判明した。そして、1909年の時点で、ファンニウィル（Fanniwirh）クランの男性1人、ウイスス（Wuisusu）クランの女性1人がいたが、1931年の段階ではそれらのクランの存在が確認されない。これは、それらのクランが滅亡したことを示すものである（クランが絶えた状況については〔須藤 1984：280-282〕を参照されたい）。いずれにせよ、70年間に島人口は、大幅に増加しているが、首長クランもそれに比例して成員数が増えている。

つぎに、クランの構造について検討してみよう。サタワルの母系クランの系譜をたどり、最古の祖先までの深度は、古いクランで8～9世代、新しいクランでは4～5世代である。前述した Sawsát クランの場合、サタワル島への最初の移住者と信じられている4人の男性と7人の女性の祖先まで、系譜をたどることはできず、最古の祖先は、1980年当時の最上世代者からみて5世代前である。一方、Neyáár クランの男性祖先の Akurup は、サタワル島が台風の襲撃で、島に海水があがり、飢饉になったときに、サタワルの人びとを連れてサイパン (Saipan) 島に移住したという伝説がある¹¹⁾。これは、歴史的事実と考えられており、1810年代のことと推定される [McCoy 1973: 356]。

この Akurup (図3の1) は、Neyáár クランの系譜のうえで、クラン最古の女性祖先とキョウタイであると述べられている (図3参照)。これを事実とするなら、サタワルに現存する母系クランの系譜は、すくなくとも1800年までさかのぼれることになる。そこで、Neyáár クランの女性を中心にした系譜 (図3) と居住区 (図4, 5, 6) とを参考にしながら、サタワル社会の母系クランの構成と居住の概略を明らかにしよう。

Neyáár クランは、1909年当時、男性29人と女性22人が7つの家に分住して居住集団を構成していた様子がかがえる。それらの家は、地図から判断すると150mのあいだに建っている (図4参照)。そして、共同炊事小屋 (Kochhaus) が2個所に分散しているので、Neyáár クランは2つの下位集団に分れていたことが推測される (図4の29～30, 32～37)。Sarfert が表記した家に住む人名を Neyáár クランの系図 (図3) にあてはめてみると、図4の29～30は図3のA系統に、32～36は図3のB系統にそれぞれ対応する。

そして、1931年の土方の居住区図 (図5) では、Neyáár クランの男性36人と女性37人は、2軒の炊事小屋をもち、1個所の居住地ラピーラキジ (Řapířakíř) に建てられた7軒の家に分住している。しかし、土方の地図には、ドイツ資料にあったもう1つの下位集団の居住地 (図4の29～30) にあった1軒の炊事小屋と2軒の家が描かれていない [土方1984: 56-58] (図5参照)。

土方が記述している Řapířakíř の7軒の家の住人の名前を図3の系図に照合すると、b-1系統が1軒、b-2とb-3の系統が1軒、b-4とb-5の系統がそれぞれ1軒の家に居住していることが判明する。そして、a-1とa-2の系統も1軒の家に住んでいる。つまり、1909年当時に2個所の居住区に分住していた人びとが1931年には同じ居住区に住むようになったことを示している。それは、1920年ころに Neyáár クランの成員が相次いで病死したので、それまでの居住地をすててラピーラキル (Ráápiirakíř) 地区 (図5の最下部、図6の35) に集住したからだという。その後、クランの成員数が86人に増加したので、1980年には3個所の居住地 (図6の35, 52, 56) に分かれている。アピニイマニカット (Yápiniiymwenikát (52)) の居住区には a-1, a-2 の系統が、Ráápiirakíř (35) のそれには b-1, b-2, b-3, b-5 の系統、そして Neyáár (56) のそれには b-4 の

系統の成員が分住しているのである。

1909年当時のNeyáár クラン成員の財の保有関係については明らかでないが、土方が調べた1931年では、女たちがタロイモやパンノキを持ち寄って共同炊事し、調理したものを家単位で分配する形態をとっていた〔土方1984:71〕。これは、クランが財産共有体を形成していたことを示している。つまり、クランの共有財を成員が分割して使用する形態である。しかし、1980年になるとNeyáár クランには、クラン共有財はなく、前述した3居住（分節）集団が財産所有の単位になっている。そのために、一つの居住区に住む各分節集団（母系拡大家族）単位で、家族成員各人にタロイモ田やココヤシ林、パンノキの使用を割りあてている。そして、料理もそれぞれの炊事小屋でつくり、各成員に分配して家単位で食事をとっている。それら3つの分節集団が生産活動や消費活動を日常的に共同で行うことはない。ただし、食料の枯渇期に備えてパンノキの実を土中に貯蔵し、マールとよばれる「発酵パンノキの実」をつくる作業には、分節集団の女性成員が共同である。3分節集団の男性たちは大型カヌーを建造するとき共働するし、女性たちもその労働者の食事を共同でつくる。

このように、1980年当時は3分節集団が共同して食料生産にあたる機会はほとんどみられない。しかし、分節集団がそこから婚出した男性成員の子どもたちに、贈与すべき土地やココヤシ林がない場合には、食料資源に余裕のある分節集団がいくらかの財を融通する。つまり、クランは財産共有体としては機能していないが、クランの男性が彼の子どもに生産財を贈与、相続させる慣行のもとで、分節集団間での財の利用を調整するはたらきをする（財の贈与方式については〔須藤1984〕で詳述してある）。また、サクワル社会でクラン統合の象徴となるのはカヌー小屋である。Neyáár クランは、Ráápiirakirhの居住地の海岸よりにSikafinaという1軒のカヌー小屋（図4の31、図6の58）を所有している。この管理と利用は、クランの男性成員の権利であり、責任となっている。そして、このカヌー小屋の修復や屋根替えなどを指示するのはNeyáár クランの首長である。首長は上で述べたクランの大きな事業のほかに、土地の処分、他のクランとの土地係争、クラン成員の規則違反や婚姻などに責任をもつ。首長は自らの母系クランに問題が生じたときには、クランの集会を招集し、自分の判断で適確な指示をだす。

2. 首長権の継承とクランの存続戦略

首長の地位と首長権は、母系クランの最上位の系統、最上世代、最年長の男性によって掌握され、母系的に継承されるのが原則である。図3を参考に、Neyáár クランの首長権の継承についてみることにしよう。系図上では、首長は1. Yisareito (5)、2. Rapo (19)、3. Saufa (26)、4. Sawpuna (36)、5. Yakkaw (43)、6. Rumay (58) がその任についている。そして次期首長はEwiyong (63) が予定されている。1980年当時、

Neyáár クランの首長 Rumay (55 歳) は, Ewiyong (76 歳), Ukka (65 歳, 図 3 の 66) より年少者であるにもかかわらず, 首長の地位についている。首長権の継承は, 基本的には母系クランの中の最優位 (代々長女) の系統の男性成員のあいだで母系的に行われる。つまり, 直系の系統の兄から弟へ, ないし母方オジ (*tukufáiyiy*) から姉妹の息子・甥 (*fatúw*) へである。

この首長位は原則として養取に影響されない。図 3 の Sawpuna と Ewiyong の場合は, 彼らの母ないし祖母 (Nayurusatt) が Sawsát クランに養取され, 彼らもそのクランの本拠地アボウ (Yápéew) で生まれている。しかし, Sawpuna は先々代の首長をつとめ, Ewiyong は Neyáár クランの次期首長の地位にあり, 島の首長会議のメンバーでもある。このことは, サタワル社会の養取慣行が, 養取によってクラン所属を変更しても, 自分の実のクラン成員権 (族籍) を放棄しない性格であることを示している。そして, 養取先の成員権も獲得し, 双方の母系クラン「成員」としての権利を行使できるのである。

土方もサタワルの養子は, 「氏族籍は移り得ないのであって, サモーンの相続順位も除外されずにいる」[土方 1984: 34] と述べている。さらに, 「このように養子等の理由によって他氏族の間に暮し, 他氏族の者と親子兄弟関係を結んでも, 女の腹から生まれた事実は曲げられず, したがって族籍の所属を移すこともままならず, 当然権威位置の相続順位にも何ら影響をおよぼすことがないのである」[土方前掲書: 34] と, 首長の継承順位について説明している。

Neyáár クランの系図 (図 3) を概観して, 母系クランの構成上の特質としてつぎのことが指摘される。1 つはクランが分裂し, 分節集団 (リネージ) を形成するのは, 系譜関係においてかなりの世代を経た段階で生じている点である。図 3 において, A 分節集団と B 分節集団は, 系譜上, A 集団の Rumay (58) からみて 6 世代前の祖先, Nefarmay (2) を共祖とする関係である。彼女は系譜上の最古の祖先であり, その 2 人の娘の子孫が 2 つの母系出自集団に分節化したのである。その時期は明らかでないが, ドイツ資料の 2 つの炊事小屋を別個に所有する単位が, ちょうど A 集団と B 集団に相当する。そのとき (1909 年に) 生存していた成員は, A 集団では 5 世代目の Nesor (29) と Nefaf (30) である。しかし, 1931 年には A 集団と B 集団は, 融合していた形跡がみられることから [土方 1984: 56-57], この下位集団の離接と融合は, 集団の人口の増減などの要因で反復性を特徴としていることを指摘できる。

第 2 の点は, 母系クランの女系の系統 (ライン) ないしは分節集団 (リネージ) において, 2~3 世代間に女性後継者がいないときに, ほかの同じクラン内の系統から養女をとってその系統を存続させようとする企図がみられないことである。そのことは, 図 3 の第三世代の Naikinam (12), Yinusukupwe (15), 第四世代の Nowanikar (22) などの女系子孫が絶えている様子をみれば明らかである。これは, サタワル社会におけ

る母系クラン（出自集団）の編成理念および集団存立の経済的基盤となる財の保有方法と関連していると考えられる。この社会では、姉妹および彼女らの子どもは、「一体」とみなしている。また、母方の平行第一イトコは、「同じ母から生まれた子ども」であり、「お互いの子どもを育てあう」関係にある。したがって、母系出自集団の存続は、自分（女性）に娘がなくても、実の姉妹、母の姉妹の娘ないしは母の母の姉妹の娘の娘（類別的女性キョウダイ）に娘がいれば可能になるという考えに基づくのである。

他方、クラン内で女系の系統が4世代以上経ち、その系統に女性継承者がいない場合、同じクランの他系統から養女をとる傾向がみられる。現在、Ráápiirakirhの居住区に住む図3のb-1の系統のNasukuno（32）がその例である。彼女はb-4系統のNewawen（47）を養子にして自分の系統を継承させた。この例は、財を分割し、炊事小屋を別にする段階、いかえれば分節集団として離接した状況では、他系統から後継者を養取することによって、2つの系統が融合することを示している。つまり、クラン内で母系出自を直系的に共有する祖先から4世代以上経過すると、独自の系統として集団を形成する傾向が顕著である。この自立した女系の系統である、分節集団（リネージ）の維持が不可能になったときには、ほかの系統から後継者を迎えることによって他系統に合体する方法を優先させるのである。

しかし、母系クラン内に離接的な分節集団が成立すると、その集団の存続は、同じクラン成員によって女系を貫徹しようという観念が薄らぐ傾向もある。これは、図3のa-1の系統の例をみれば明らかである。この分節集団は、第7世代目と第8世代目の2世代にわたって、その集団の男性成員の娘（図3の57, 71）を養子にすることによって、集団を存続させている。これは、出自集団の男性成員の子どものうち、少なくとも1人は、父の姉妹ないし父の母の養子になるというサタワル社会の養取慣行と関連している。Yápinymwenikátの居住区（図6の52）に住むa-1集団においては、養子が女性であったために、その女性が父の集団の後継者の地位についた例である。

このように、分節集団のレベルで、後継者をえるためにクラン成員と非クラン成員との双方を後継者として獲得するという対照的な方法がとられている。このことは、母系クラン存続の方法としては、女系貫徹のイデオロギーが潜在的に強調されるものの、現実には、母系クランの男性成員の娘を選択することも許容されることを示唆している。つまり、後継者獲得の方法としては、養取が優先されるが、養子には女系子孫だけでなく集団の男性成員の子孫も考慮される。その点で、アイナンは母系出自集団とはいえ、非母系単系性を包摂する柔軟性を特徴としている。

第3点は、この母系クランの構造的柔軟性と関連するが、クラン成員として血縁関係のない他島出身者をもくみいれていることである。図3のYinowkar（20）は、サタワル西方500 kmのオレアイ島に滞在し、そこの男性と結婚した。子どもがなかったために彼女の夫のクランの女性、Nekawetiw（34）を養女にして育てた。

Nekawetiw もオレアイの男と結婚し、サタワルに住んだり、オレアイに帰ったりの生活をしてきた。そして、彼女の娘、Nakupumai (48) はオレアイで生まれ、フェイス (Fais) 島の男と結婚した。1942 年ころ、日本の海軍がオレアイ島に飛行場をつくるため、島民を他島へ強制移住させた。そのとき、Nakupumai はサタワル島へ来て、1979 年に彼女が死亡するまで、Neyáár クランの女性、Nimeisa (69) を養女にして生活をしてきた¹²⁾。この事例は、Neyáár クランの女性が、オレアイ島の異なるクランから 1 人の女性を養女として育て、その子孫が養母の出身クランの成員としてくみこまれたことを示している。つまり、非血縁者を養子(女)にすれば、その子孫は養母のクランにたいする成員権を獲得できるのである。

この養取による母系クランへの帰属方式は、島外出身者だけでなく島の人びとのあいだでも、クランの存続を目的として行われる。その例として Neyáár クランの Nayurusatt (21) の場合をあげることができる。Nayurusatt は、Sawsát クランの養母、Yinowkowa (9) とは血縁関係がないのに、養母の要請で養女になった。その背景には、養母が息子だけで娘がいなかったこと、そして彼女の姉妹や母方女性イトコも多くの娘を生まなかったという状況がある。そのために、養母は Sawsát クランと「親しい関係」にある Neyáár クランの女性を、彼女の系統の後継者として養取したのである。その結果、Nayurusatt の子孫は養母が保有していた食料資源である土地や樹木をそのまま受けついで、Yápéew 居住区 (図 6 の 43) に住み続けている。そして、Nayurusatt の息子 (Sawpuna)、彼女の娘の息子 (Ewiyong) が Neyáár クランの首長と次期首長の地位にあることは前述したとおりである。

つぎに、Neyáár クランが、養取によらずクランの男性成員と結婚した他島出身の女性およびその子孫を Neyáár クランの成員としてくみいれた例を考察しよう (図 7 参照)。Neyáár クランの男性 Sawek (図 3 の 51, 図 7 の 3") は、エラート島出身の女性の娘 Nepanikar (図 3 の 52, 図 7 の 3) と結婚したが、彼女の母系クランはサタワル島には存在しない。彼女の母親をサタワル島へ連れて来た男性が Neyáár クランの成員であったので、彼女の母親は Neyáár クランの居住地に寄留していた。そして、Nepanikar が Sawek との結婚後、Neyáár クランでは彼女夫婦にココヤシ林、パンノキ、タロイモ田を分与し、居住地も新たにあたえた。

この配慮によって、Nepanikar を始祖とする自律的集団が誕生した¹³⁾。しかし、この集団は、出身島の母系クランのヌクヌファヌ (Nukunúfanú) としてではなく、Neyáár クランの 1 分節集団としての地位におかれた。その集団が分節集団を形成できたのは、1920 年代に Neyáár クランの成員人口が少なかったこと、Nepanikar とその母親が Neyáár クランに寄留しているあいだに Neyáár クランのために良く働き、またそのクランの移住伝説や土地の移譲の歴史など重要な歴史伝承を修得したことなどがあげられる。

つまり、エラート島から来住した Nukunúfanú クランの母子は、寄留者の地位にいる

あいだ、Neyáár クランの人びとから「信用できる人」であるか否かを監視されていたのである。こうして成立した寄留先のクランと新参者の関係は、「お互いに知りつくした」、あるいは「炬の中味」という用語で表現される。新参者は土地などを分与してくれたクランにたいし、「いうことを聞く」義務をおうことになる。そして、それらの集団間での通婚は禁止される。

この事例は、サタワル社会に外部者が移り住み、独立した出自集団を形成する過程を示してくれる点で興味深い。この場合は、来島後3世代しか経過していないにもかかわらず、寄留先のクランの1分節集団として位置づけられている。このことから、さらに世代を経ると、その集団本来のクラン名称を名のる自律集団へ発展する可能性のあることが予測できる。というのは、その集団が保有する財の処分は、それを分与してくれたNeyáár クランの承認えずに独自に実行できるし、また他島のクランとの関係においては、Neyáár クランの成員であると同時に、他島の彼・彼女ら本来のクランであるNukunúfanú クラン成員とのあいだでも密接な交流を続けているからである。

この例は、サタワル社会に自分と同じないしは同系のクランをもたない新参者（女性）でも特定のクラン成員になることができるが、そのために一定の手続き制度化していることを示している。それは、新参者がクラン成員としてふさわしい資質ないし資格を有しているか否かを判定することである。その基準が寄留するクランへの貢献度であり、従順さおよび「忠誠心」である。その最終判定は、少なくとも2世代間の新参者親子の行動によって結論づけられる。このことは、サタワル社会の母系出自集団が、無差別に島外者をくみこむ寛容性をもっているのではなく、いくつかの基準によって選択する権利を保持していることを意味している。

それにたいし、他島にいる同一クラン成員が来島した場合、彼・彼女とサタワルの母系クラン成員とのあいだで系譜関係が確認されれば、彼・彼女はサタワルのクラン成員と同じ資格と地位を得る。そして、彼・彼女はサタワル島のクランないし分節集団（リニージ）が保有する財を、自由に使用する権利をもつことになる。たとえ、系譜関係が確認されない場合でも、クランの名称や同系の名称であることが判明すれば、サタワルにあるそのクランへ帰属し、土地などを利用することが許される。その点、他島出身かつ非クラン成員のサタワルのクランへの所属方式と、他島出身で同一クラン成員のそれとは質的に異なる。

ここでサタワル社会の母系クラン（出自集団）の構成および存続方法について要約する。この社会において出自集団の核は、基本的には、3世代間の女系出自成員より編成されており、その成員のあいだに女性子孫がおれば、出自集団の絶滅という事態は生じない。しかし、クランが分裂し、分節集団（リニージ）を形成し、女性後継者が不在の状況が生じた場合、集団存続のための手段が講じられる。そのさいに優先される方法は養取である。そして、養子を同クラン成員からとるか否かは、クラン全体の判断によ

るのでなく、財産共有体としての分節集団単位での選択にまかされる。したがって、理念としては、母系出自で貫徹しようという指向性がうかがえるものの、実際には非母系成員、とくに母系出自集団の男性成員の娘を養女にする例がみられる。また、非血縁者を養取して、分節集団の後継者にする方法もとられる。このように、サタワル社会の母系クランは、分節化すると分節集団が「独自」の自律的集団として機能し、クラン全体としての統合性は二次的関心事とされる傾向を顕著にしている。さらに、母系クランは、島外出身者でかつ非血縁者をもくみこむ可塑性を特徴としている。

Ⅲ. 母系クランの属性と機能

1. 伝統的知識の共有体

複数の分節集団（リネージ）によって構成される母系クランにおいては、前述のNeyáárクランの例からうかがえるように、それが食料資源（土地、ココヤシ林、パンノキ）を共有する実体になっていない。一方で、クランは、分節集団間で成員人口と土地などの財の保有数とに不均衡が生じたときに、財を調整することがある。また、集会所ないカヌー小屋は、基本的にはクラン単位で所有する性質のものである。しかし、現在ではカヌー小屋の近くに居住する異なるクラン成員とカヌー小屋を共同で使用するようになっている。サタワル社会では、クラン成員が参集してクランの統合ないしクラン成員の系譜関係を確認し、結合を強化するための儀礼（祖先祭祀など）は存在しない。首長クランの成員が死亡したとき、数ヶ月後にその死者を追悼する目的でタロイモないしパンノキの実の集積と分配をする儀礼がある〔須藤 1989b〕。これは、島の人びとの全員の参加のもとに実修され、死者のでた母系クランだけで行うものではない。したがって、クランは排他的な儀礼的集団として性格をもっていない。

ただし、秘儀性のつよい伝統的知識（*roong*）のうちいくつかの項目は、特定の母系クランに占有される。たとえば、カツオなど大型回遊魚の招来、パンノキの実の豊穰、嵐しずめ、伝統的航海術、家屋、カヌーやカヌー小屋の建造法に関する知識の体系である〔石森 1985〕。それらの呪文を唱えたり、儀礼を司祭する権利は、特定のクランによって保持され、継承される。この秘儀的知識が他のクランに流出してしまうことを避けるために、クラン成員のあいだで伝授する母系的継承法が確立されているのである。この点では、クランは「秘儀的知識共有体」ということができる。

母系クラン成員であることのもっとも重要な属性は、成員間での性関係および婚姻に関わる禁忌の遵守である。同じクラン名を共有する人びとのあいだでの結婚は、「もっとも悪いことがら」（*yekininngaw*）とみなされる。その禁忌事項を犯した当事者には、島からの追放という制裁がくわえられる。実際に、自主的逃走のかたちではあるが、島から追放された例が2例ある。1例は男性で島を逃げ出し、死亡したと伝えられている。も

う1例は女性で、他島に移って生活している。

1909年から1980年までの70年間、サタワル社会で407件の婚姻事例をえているが、うへの2例以外に、クラン成員どうしの結婚例はない。キリスト教に改宗以前（1953年）のサタワル社会では、男性は平均3回の結婚を経験している。サタワルのクラン外婚の規則は、サタワル島出身者だけでなく、同じ名称ないし同系の名称をもつ他島の母系クラン成員とのあいだにも規定される。土方は、サタワルの1932年から38年の7年間の結婚96件にたいし、離婚55件という多さを、「結婚、離婚が無思慮に、頻繁に行われる」からであると驚いている[土方1984:162]。総人口300人足らず夫婦60組の中での結婚回数は死別を含まないにもかかわらず、男は2.6回、女は2.4回であると報告している。

このような人口数百人の島でクラン外婚規制を続けるなら、島内で同世代の配偶者を選択することは限定される。そのために、若者のなかには他島に出かけて、同系のクランの庇護のもとで暮らし、結婚相手を探す者もいる。前述の407件の婚姻例のうち50件は配偶者（男性46人、女性4人）が他島出身者、49件は他島へ婚出したサタワル出身者（男性36人、女性13人）である。婚姻例が最も多い島は、オレアイとプルワットでそれぞれ21件を数える。70年間で他島出身者との婚姻件数は総婚姻件数の24パーセントをしめ、男性が82人である。このことは、他島の同系のクランとの関係を維持することが、配偶者選択の契機となることを示している。

また、クランの機能として、島嶼間で同じクラン成員を相互に庇護しあう性格をあげることができる。他島からきた同じクラン成員の滞在中の食事、宿泊をはじめ、あらゆる世話をすることが、サタワルのクラン成員の責任となる。他島出身者がこの島に永住する場合には、財の使用を認め、結婚するときには財を分与し、贈与する。つまり、サタワルのクラン成員と同等の権利と資格を来島者に付与するのである。したがって、サタワルの人びとは、カヌーないし連絡船で他島を訪れるときには、自分と同じクラン成員がその島にいるか否か、いる場合には、その人びととどのような系譜関係になるかを覚えることが必須事項となる。

さらに、クラン成員数が減少して首長ないし族長になるべき男性がいない場合に、他島の同一クランの成員をサタワルへ呼び寄せてクランのリーダーにさせことが起きている。このクランを存続させる目的で他島からクラン成員を補充した例は4件ある。それらは、いずれも母系クランの族長として男性を招聘したものである。1978年にPiikクランは次期の族長候補が幼児であるため、トラック北西離島のウルル(Ulul)島から30才代の若者を招いてその族長の任につかせている。

2. 島間の親族紐帯と安全保障

ヤップの東方離島からチューク諸島にかけての母系クランは、広域にわたり島嶼間の

つながりが存在する。そこで、サタワルの8つの母系クランと他島の同じ、ないしは同系のクランとの関係を表1に基づいて考察してみよう。表1から Neyáár, Yáánatiw, Sawsát の各クランは、10以上の島の母系クランと系譜上の関係ないしは友好的関係を維持していることがわかる。その他のほとんどの母系クランも5以上の島の母系クランと関係をもっている。

この島を越えた関係は人びとの島間の相互訪問を可能にする。土方は他の島への訪問は、単なる遊びや享楽のためでもあるが、「今一つの理由があるので、それは島々の間に有無を相通ずる交易である」[土方1984:171]と指摘している。1930年～40年代は、日本の商店が島々におかれ、人びとの必需品は手に入れられるようになった。しかし、「土俗的な習慣」に必要な品物は、カヌー航海による交易によって手に入れられなかった。その交易の様子を土方の記録[土方1984:172-175]と本書の日記[180-181]から抜粋してみよう。

この島のものは9月終わりに、島で出来るテール布(腰布)やアナーン椰子縄、また西方から手に入れたキーン帯(べっ甲製帯)などを集めてポノワット島に渡り、そこに滞在しているとポノワット人はそれらをもって更にトラック方面へ出かけて行って、ラン黄粉(ウコン)とか、貝製のマァレムアル(腕飾)とか、ファイ・ニ・ボ(手杵)などと交換して帰ってくる。このトラック北西離島の船は大概トラック環礁内の木曜島に行く。こうして持ち帰られたものは翌年の海が良くなった2月の終わりにこの島に持ち帰られるのである。

サタワル島に産しない「ウコン」や貝製の腕飾りはチュークから、石杵やべっ甲製の腕輪もプルワット(ポノワット)などの東方の島から、べっ甲製の腰帯は西方のヨーロッパ環礁から、それぞれ交易航海で入手していることがわかる。そして、サタワルからは腰布の織物やココヤシ繊維製ロープなどが交易品として提供されている。この航海においてサタワルの人びとは、9月から2月まで約半年間もプルワットに滞在することになる。その間の滞在は、同系の母系クラン成員の世話や島全体の人びとの食料支給の慣行によって可能となる。

この航海で1艘のカヌーで持参したものは、腰布50枚、椰子縄100尋束30巴、日本製大幅木綿赤布10尋、同黒布5尋、同白布5尋である。持ち帰ったものは、ラン黄粉100個(片手のこぶし大の円形のウコン粉末玉)、日本製布4尋、石杵1個、貝製腕飾り4個、擬餌針10個である。これらの交換比率は以下のように決まっている。ラン黄粉1個=腰布1枚、石(手)杵=太い椰子ロープ25尋、べっ甲製帯(9条最上等品)=ラン黄粉10個および腕輪2個、擬餌針10個=椰子ロープ100尋などである[土方前掲書:174;本書180]。

交易航海を行うカヌーの乗組員は母系クランの男性で構成され、腰布はその母系クラン

ンの女性が提供する。したがって、持ち帰ったウコンは腰布を出した女性に配分される。ウコン入手を目的とするプルワットやチュークへの航海は、1960年代までさかんに行われていたが、その後サタワルの人びとは連絡船でヤップなどの州都へ出た時にウコンを購入するようになった。

このような交易航海においても、島間のクラン関係が大きな意味をもっているが、その関係は多様である。相互に系譜関係を確認できず、クランの名称も異なるにもかかわらず、他島のクランと友好的なクラン関係が維持される例もある。それは、次のような関係による。1つはクランの起源伝承を共有していないが、ある時期に「友好的関係」を結んだもの、2つにはヤップ島を盟主とする貢納航海、サウエイ (sawey) においてパートナーとなる関係をもつものである。

前者の場合は、他島の異なるクラン成員が来島したときに、手厚くもてなし、またサタワルのクラン成員としてくみいれたことによって成立した関係である。前述したNeyáárクランとエラート島のNukunúfanúクランの例がその関係にあたる。また、YáánatiwクランとオレアイのSaufanachikクランの場合は、20世紀初頭にオレアイ環礁が台風の被害をうけ、一団の人びとがサタワル島へ避難してきた。そのとき、一部の人びとはオレアイ島へ帰らずにこの島に住みつづけた。その1つがSaufanachikクランであり、Yáánatiwクランがそれに土地を分与して、1分節集団としてくみいれたものである。このように、他島出身の女性をクラン成員として帰属させたNeyáárクランとYáánatiwクランは、それぞれ女性始祖の出身クランとのあいだに、「友好的関係」を結んだことになる。今でも、それらのクランの成員が、エラート島やオレアイ島に滞在するときには、NukunúfanúクランないしSaufanachikクランの歓待と世話を受けている。

後者のサウエイは、ヤップ島のガチャパル (Gachapar) 地区およびワニヤン (Wanyan) 地区を頂点にし、チューク (トラック) の北・西離島にいたる中央カロリンの島々が政治・宗教的な序列にしたがって連鎖する島嶼間の支配—被支配関係である。この連鎖は、東方に位置する島が西方のそれよりも劣位にあるという序列に基づいている。その関係は、2～3年に1度、最劣位の島から順々に貢納物 (腰布、ココヤシロープ、パンダナス製マットなど) をヤップに届ける航海によって確認される。ヤップ外の島々のあいだでは、ヤップに最も近いウルシー (Ulithi) 環礁のモグモグ (Mogmog) 島の第1首長が最上位に位置し、これよりも東方の島々の首長に指令を出して朝貢航海を実行させる。そのために、各島の首長クランはモグモグ島の首長クランと「盟約」を結んでいる [LESSA 1950; ALKIRE 1978; 牛島 1987; 須藤 1998, 2008]。

この盟約のもとに、貢納物が外洋航海用カヌーによって東端のトラックの北西離島の島から西方の島々へとリレー式にモグモグ島まで届けられる。その貢納物は、モグモグやウルシー環礁の島々の首長たちがカヌーでヤップに届ける。その首長たちがヤップから貢納品のお返しを持ち帰るまで、東方の島々の人びとはモグモグ島に滞在し、パート

ナーのクラン（同系のクラン）の世話になる。そして、サウエイのお返しの物品とは別に、パートナーの庇護のもとにウルシーの人びととのあいだでも交易と交換を行い、サンゴ礁島には珍しい品々を島に持参する。

サウエイ航海は20世紀初頭にドイツ政庁によって廃止されたが、島嶼間のクランの盟約関係は継続している。サタワル島の Yáánatiw クランは、モグモグ島の首長クランである Fathilith とその関係を維持している。1950年代に Fathilith の男がサタワル島へカヌー建造で訪れたときに、彼を世話しカヌーの建材を提供した。その後も Fathilith クランからカヌーの浮材を要求されたさいにも送り届けている。そして、1978年に Fathilith の首長の妻が死んだときには腰布を贈っている。このようなサタワルの Yáánatiw クランからの物資の提供にたいし、モグモグ島の Fathilith クランからは、米などの食料や船外機つきモーターボートを贈ってきている。また、Fathilith クランは、ウルシー環礁の中・高等学校に寄宿している Yáánatiw クランの生徒の食料として、そのクランが所有する無人島での魚介類やココヤシなどの食料資源の利用を認めている。

以上でのべたように、サタワルの母系出自集団（クラン）の機能の諸相のうち、もっとも重要な事項はクランが外婚単位になっていることである。サタワル島内のクラン成員の統合ないし結束を認識し、強化するための象徴物ないし儀礼は存在しないが、それに類比できるものとして集会所（カヌー小屋）と秘儀的知識の共有という点をあげることができる。つまり、秘儀的な知識を共有することにより母系クランとしての誇りとアイデンティティをもち、成員の所属意識を高めているのである。

一方、他島との関係においては、配偶者選択、クラン成員の補充、成員間での相互援助および庇護という役割も重視される。さらには、近隣の島々との交易航海や「釣り針交易」、そしてヤップ島とのサウエイ航海などによって、島々は連なっており、自然災害や食料不足などの際には、救援し合う「同盟関係」が成り立っている。

さらに、面積が小さく、サンゴ礁島ゆえに地味に乏しく、人口が少なく、そして周期的に島を襲う自然災害などに対処するために、島世界は一つの島だけで完結することなく、他島との間に人の交流、資源、知識や芸能などの交換を行う関係をあみだしている。この関係は、島を越えた母系の親族紐帯だけでなく他者間でも友好的な関係を創出している。このような島間の相互支援関係は、安全保障として機能しているといえよう。

おわりに

サタワルの人びとにとって、母系クランは個人が島で生存していくうえで不可欠な集団である。島世界で生きていくには、いずれかの母系クランに所属しなければならない。そして、日常的な生活においては、土地所有集団や生活共同体など、「集団」としては認識されていないが、潜在的ないし精神的に社会・政治的地位の決定、相互扶助の集団と

して機能する。また、母系クランはひとつの島だけで完結する集団ないしは人間・社会関係ではない。多くの島間に母系の系譜関係を維持して成員の往来を可能にしている。

母系クランは、同一のクラン成員間での婚姻を禁ずる、族外婚の単位になっている。人口数百人、母系クラン数10以下の社会においては、族外婚規制によって島内で配偶者を選択できる可能性は限られる。配偶者選択の範囲は島外へと広がるのである。このことは、母系クランが1島だけで「自給自足」が可能な集団ないし人間・社会関係ではないことを意味する。島々は母系クランの姻族ないしは系譜関係によって連なっている。したがって、母系クランないし母系出自集団は配偶者選択や人的交流、食料や物的資源の流通、知識や芸能などの文化資源の交換などを行うことで存続が可能になる。

土方が滞在した1930年代に、サタワル島は、オレアイやラモトレクなどの西方の島々、プルワット、プルスク、ブンナップなどの東方の島々とのカヌー航海による往来が頻繁であったことが日記につづられている。また、他島からの訪問者とサタワルの人びとの関係が同一の母系クラン成員にかぎらず、他者をもクランに組み入れるなど親密であることについても記されている。この状況は、1980年代のサタワルにおいても大きく変わってはいない。海を道にして島と島、集団と集団とが繋がり、人・モノ・知識などが動くことによってのみ島社会が成り立つのである。海を越えた社会的連携が人びとの生活と生存を可能にするという事実は、時代を超えても変わらないサタワルなどミクロネシアの島世界の特質であるといえる。

註

- 1) サタワルのアイナン (*yáinang*) は2つの出自集団のレベルに分けて把握できる。①始祖までの系譜を共有していないが、同じ名称の集団に属していると認識する集団成員レベル、②始祖までの系譜を相互に確認でき、土地や財産を共有し、日常的に相互関係を密にする集団成員レベルである。社会人類学の術語として、①がクラン (*clan*)、②がリネージ (*lineage*) の用語をそれぞれ適用することができる。サタワル社会は、1980年当時、8母系クランとその分節集団である16の母系リネージで編成されていた。本稿では、アイナンに社会人類学の術語、「母系クラン」の用語を当てて、その構造について考察する。
- 2) モゴスファル (*Mongonufarh*) の語義は、「パンダナスの木之又」を表わす。その語と母系クランの名称との関係については、次のような伝承がある。

むかしイファリク (*Ifalik*) 島に3人の女の子が生まれ、それぞれをゆりかごに入れて「パンダナスの木の本の枝」にかけていた。イファリクの人びとがほかの島に移住することになり、1人の女の子をその島に残し、1人をオレアイ (*Woleai*) 環礁へ、もう1人をラモトレク (*Lamotrek*) 環礁へ連れて行った。そのために、元来は同じクランであった女の子が、それぞれ異なる島で成長し、子どもを生んだ。その子孫がさらに中央カロリンの島々に移住し、現在のように多くの島にそのクランがひろがった。サタワルへ来た *Mongonufarh* クランの子孫は2つの系統に分かれた。1つは、イファリクを出てオレアイとラモトレクを経て移住したグループで *Yáánatiw*、もう1つはイファリクから直接ラモトレクへ行ったグループで *Noosomwar* である。

土方は、サタワルの(1)~(3)の3クランは、元来、同じモゴヌファル氏族であり、サタワル島へ来てから分住し、その居住地名を氏族名にしたと述べている[土方1984:24]。筆者のえた情報では、(1)Neyáárクランは、ほかの島(イファリク、ラモトレクとブンナップ(Pulap)島)にあるYatonoyongと同じ系統で、中央カロリンに広く分布するMongonufarhクランとは別である。ただし、そのクランは、オレアイ島やブルスク(Pulsuk)島にあるクランとの関係ではMongonufarhと同じ系統になる。しかし、Neyáárクランの長老は、自分のクランの祖先はラモトレク島のYatonoyongクランから分かれたという伝承を信じているので、筆者はNeyáárクランをMongonufarhクランとは別系統のものと考えている。前にオレアイ島のクラン関係では、Mongonufarhと同一系統にあると記したが、それはNeyáárクランの男性と結婚してサタワル島に住んだ女性が、オレアイのMongonufarhクラン出身者であるために、その子孫の母系クランとの関係を指している。つまり、Neyáárクランにくみこまれた1分節集団の系統がオレアイ島のMongonufarhクランに出自することを示しているのである。

- 3) チューク(トラック)諸島には50近いアイナンとよばれる母系クランがあるが、その大半はコスラエ(コシャエ)島から移住したという伝承をもっている。ポーンベイ(ポナベ)島をふくめコスラエ島以西のカロリン諸島のほとんどの島々の母系クランの起源伝承は、コスラエを起源地とする傾向が顕著である。
- 4) 母系クランのラピトについてはいくつもの異伝がある。同じクランの伝承でも、話者によって経由地や起源地が異なる場合もある。そして、サタワル島への移住史については、クラン間で見解が分かれる。それは、同一クランでも名称だけが同じで異なる島から移住した場合や、異なるクランが合体したなどの歴史的條件に左右されるようである。しかし、Sawsátクランがサタワルの最初の人であるという伝承は、すべての長老が認めるところである。
- 5) Sawsátクランのラピトに登場する人びとのうち男性は、1. Yiretenukが「最高責任者」となり、2. Yeponuwut「集会所の責任者」と3. Yeponufanu「島を歩き回って仕事をする責任者」が、指令を出したり、情報を集めてYiretenukに伝える役についた。女性は、1. Nepofanuが「島の土地を管理する人」で女性長として、2. Nesarowa「カヌーで来た人を迎える人」と相談し、外来者に土地を分配する責任者である。そして、ほかの人びとは「東から来る外来者を見張る人」、「西から水路を通して来る人を知らせる人」とか「天気予測する人」などの役割をもっていた。
- 6) Noosomwarの語義は「さらに遠くへ行かない」ことである。それは、ラモトレク島から移住してきた一団がサタワル島に留まるか、さらに東方の島へ行くかを話しあい、noosoné「行くことをあきらめる」ことにしたことを意味する。mwarは、「さらに」とか「それ以上」の意味を表わす副詞である。したがって、Noosomwarの地名は「航海をあきらめて(サタワル島に)留まる」という語義から派生している。
- 7) サイニコエ(sayiniké)は「航海」(say)と「つり針」(ké)の合成語であり、「つり針から魚が外れないようにきつく結ばれる」意味である。この語が示す島の結合は、政治・宗教的な序列関係のほか、経済的要因もある。それは島がサンゴ礁島でありながら、島の生態条件が異なるからである。ラモトレクは環礁島で内部に広い湿地があり、タロイモ田に開墾されている。しかし、ココヤシやパンノキの実の自給が低く、人びとは主食をタロイモに依存する。それにたいし、サタワルは隆起サンゴ礁島でタロイモ田が十分でなく、パンノキの実とココヤシが重要な食料資源になっている。そして裾礁が発達していないために島周辺での漁獲が極端に少い。他方、エラートは環礁ではあるが小島で、植物性食料の獲得が限定される。その反面、島の周囲に礁湖がのびて無人島があり、漁業資源に恵まれている。このよ

うな環境下で、サタワルの人びとはラモトレクが領有する無人島（ウエスト・ファーフ島とピーク島）を利用する代償に、パンノキとココヤシの実をラモトレクへ贈る。そしてサタワル島が台風の被害を受けたときにはラモトレクにタロイモの援助をあおぐ。同様に、エラート島もラモトレク島にウミガメなどを届ける反対給付として食料枯渇期に援助を要求できる。それら3島は食料資源の不足という事態に備えて「相互援助同盟」ないしは「安全保障」を結んでいるのである〔ALKIRE1965；須藤 1998, 2008〕。

- 8) 産小屋や月経小屋などの建物をはじめ、人生の諸段階で行われる通過儀礼などは、キリスト教の受容（1953年）後、廃棄ないし廃止された。現在、首長クランと平民クランの人びとを区別するものは、首長クラン成員の葬送儀礼の期間中およびその後の数日間、死者の家の周辺の木に登ることと物を頭より高くもちあげて運ぶことの禁止と「労働の禁止」である。サタワル社会で「労働の禁止」の対象となる活動は、男性の場合、樹木の伐採、カヌー建造、家屋の建築、ココヤシの紐を綯うこと、コブラ生産やココヤシ林の下刈りなどである。女性にとっては、腰布織り、敷物編み、タロイモ田の除草などの手入れである。しかし、仕事の禁止には、食料資源の獲得、たとえば漁労活動、パンノキの実やタロイモの手入れや採取などの活動はふくまれない。
- 9) サタワルの人びとは、ウミガメは耳がないので何も聞けない動物とみなしている。一方、島の統治者（首長）は、人びとがざわざわ騒ぐ声、つまり争いごとや食べものの不足にたいする不満を聞かないで、平和のうちに暮らすことを望む。人びとから悪いことを聞かない存在としての首長を「カメの頭部」にたとえている。
- 10) 1909年にサタワル島を調査した Sarfert の資料は、居住地単位に住人数のみを記しておりその住人のクラン名は明記していない。そこで筆者は、系図作成の過程で、関連するクランの長老から当時の住人のクラン名を聞きだしてクラン人口を明らかにした。
- 11) このとき、サタワル島の人口の半分がサイパン島に移住したとも伝えられている。その当時、サイパン（Saipan）島の住民はスペイン軍によってキリスト教宣教のためにグアムに強制移住させられ、サイパンは無人島であったという。そのために、Saipan の語源は、トラック語系の saypeen（say は「航海」、peen は「空っぽ」を意味し、「無人島への航海」）に由来すると説明される。この台風による被害は、サタワル島だけでなく、プルワット、ウルルなどのトラックの北西離島も被ったために、それらの島々からサイパンへの移住者が続出した。その結果、現在、サイパンに住む非チャモロ系の先住民は、「カロリニアン」（カロリン人）とよばれている。その総人口は現在、約 5000 人である。サイパンに住むカロリン人と彼らの故地である中央カロリン諸島の人びとは、系譜関係を確認でき、相互に訪問しあっている。サタワル島の Nosomwar クランの 1 分節集団は、サイパンから帰島した女性を祖先として、出自集団を再編成している。
- 12) Nakupumai は 76 才で死亡したが、サタワル島へ来た直後に夫と離婚し、Neyáár クランの少女を養女として育てた。1979 年に病気になったときには、オレアイ島から彼女の母系クラン（Saufanachik）のキョウダイたち 10 人が看病に駆けつけた。そして、死後、彼女は Neyáár クランの墓地に埋葬された。オレアイから来た彼女のクランの人びとは、「彼女の身がわり」として、彼女の養女とその子どもをオレアイへ連れて帰った。
- 13) 筆者は社会人類学の術語、corporategroup の日本語訳として「自律的集団」をあてている。この日本語訳としては、「団体」、「共体的集団」、「共同体」などが提唱されてきた。それらの訳語の検討については〔須藤 1984：208〕で展開しているので参照されたい。

文献

秋道智彌

- 1981 「“悪い魚”と“良い魚”——Satawal 島における民族魚類学」『国立民族学博物館研究報告』6 卷 1 号：66-133。

ALKIRE, David, F.

- 1965 *Lamotrek Atoll and Inter-Island Socioeconomic Ties*. Illinois Studies in Anthropology, No.5, Urbana: University of Illinois Press.

- 1978 *Coral Islands*. Illinois: AHM Publishing Corporation.

DAMM, H. und E. SARFERT

- 1935 'Inseln um Truk, 2 Halpband: Polowat, Hok und Satawal.' In G. Tilenius(ed.), *Ergebnisse der Südsee Expedition 1908-1910*, II B6, pt.2, Hamburg: W. De Gruyter.

GOODENOUGH, Ward H.

- 1951 *Property, Kin, and Community on Truk*. Yale University Publications in Anthropology, No.46, New Haven: Department of Anthropology, Yale University.

土方久功

- 1943 『流木』小山書店。(『流木——ミクロネシアの孤島にて』未来社 1974 年, 『土方久功著作集 7 流木——孤島に生きて』三一書房 1992 年にて復刻)

- 1984 『ミクロネシア=サテワヌ島民族誌』未来社。

石森秀三

- 1985 『危機のコスモロジー——ミクロネシアの神々と人間』福武書店。

LESSA, William A.

- 1950 "Ulithi and Outer Native World," *American Anthropologist* 52 (1): 27-52.

McCOY, Michael A.

- 1973 "A Renaissance in Carolinian-Marianas Voyaging," *Journal of Polynesian Society* 82: 355-365.

須藤健一

- 1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系——ミクロネシア, サタワル島の事例分析」『国立民族学博物館研究報告』9 卷 2 号：197-348。

- 1985 「ミクロネシアにおける母系制社会の変質——トラック語圏社会の出自集団の構造」『国立民族学博物館研究報告』10 卷 4 号：827-929。

- 1989a 「サタワル社会の人生儀礼——贈与・交換の象徴性」松原正毅編『人類学とは何か——言語・儀礼・象徴・歴史』日本放送出版協会, 233-270 頁。

- 1989b 「母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌」紀伊國屋書店。

- 1998 「ヤップの離島支配——朝貢と交易に見る呪術・宗教的力」秋道智彌編『海人の世界』同文館, 197-217 頁。

- 2008 「ヤップと離島のネットワーク」『オセアニアの人類学——海外移住・民主主義・伝統の政治』風響社, 203-229 頁。

須藤健一・Sabino Sauchomal

- 1981 「カヌーと航海にまつわる民話——ミクロネシア Satawal 島の伝統的航海術の外延」『国立民族学博物館研究報告』6 卷 4 号：639-766。

須藤健一・清水久夫(編)

- 2011 『土方久功日記 III』土方久功著, 国立民族学博物館調査報告 100 号。

牛島 巖

- 1987 『ヤップ島の社会と交換』弘文堂。

表1 サタワルのクランと他島のクランとの関係

クラン名 島名	Neyáár	Yáánatiw	Noosomwar	Kataman	Piik	Sawén	Sawsát	Maasané
1. Saipan	++	++	++	++		++	++	++
2. Palau								
3. Yap								
4. Ulithi		# F				+	# S	
5. Ngulu								
6. Fais		+ M						
7. Sorol								
8. Eauripik						++	# S	
9. Woleai	# S	++ M,S	++ M		++	++	# S	
10. Faraulep		+ M			++	++	# S	
11. Ifalik	A	+ M,S	++ M		++		# S	
12. Elato	N	++ M			++	++	# S	
13. Lamotrek	A # M,S	++ M,S	++ M	++	++		# S	
14. Pulsuk	# M		++ M		++	++	# Sa	
15. Puluwat		++ M	++ M	++		++	# Sa	
16. Tamatam					++		# Sp	
17. Pulap	++ A	++ M						
18. Namonuito					++		++	
19. Murilo	# W							
20. Chuuk	# W,P	# P		+			+	
21. Namoluk		# W		++		++		
22. Mortlock	# P							
23. Pohnpei								
24. Kosrae								

註1. ++は、クランがありかつ系譜認知が可能な関係、+は、クランの存在のみを知っている関係を、それぞれ表す。

註2. #は、クランが異なるけれども友好的関係にあることを示す。

註3. アルファベットは、下記のクラン名の省略であり、アルファベットのみの表記は、過去に存在したことが記憶されているクラン名を意味する。

註4. 略号は下記のクラン名を表す。

A : Yatonoyong, F : Fathilith, M : Mongonufarh, N : Nukunúfanú, P : Pwe,
S : Saufanachik, Sa : Sauyaney, Sp : Saponupiy, W : Wanikar

表2 yáyinang (母系クラン) の起源地と移住経路

クラン名	起源地	経由地 1	経由地 2	経由地 3	経由地 4
1. Neyáár	Yarawo Yarawo	Pohnpei Ifalik	Chuuk Lamotrek	Pulap	
2. Yáánatiw	Yarawo	Yap (Kafurut)	Woleai (Wottagai)	Ifalik	Lamotrek
3. Noosomwar	Yarawo	Ifalik	Lamotrek		
4. Kataman	Puluwat Ifalik	Lamotrek			
5. Piik	Faraulap	Tamatam			
6. Sawén	Namoluk Namoluk	Fais Chuuk	Lamotrek Puluwat		
7. Sawsát	Yarawo Yarawo	Palau Chuuk	Lamotrek Puluwat		
8. Maasané	Chuuk	Pulap			
9. Soor	Tamatam				
10. Wuisusu	Tamatam				
11. Fáániwih	Puluwat				

註1. Yarawo は、現在のコスラエ (Kosrae) 島をさす。

註2. 同じクランで2つの経路があるのは、異なる話者からの情報である。

表3 サタワル島のクラン人口の変動

クラン名 \ 年	1908年		1931年		1980年	
	男	女	男	女	男	女
1. Neyáár	29	22	36	37	38	48
2. Yáánatiw	6	?	15	14	40	35
3. Noosomwar	18	6	20	21	66	45
4. Kataman	22	26	22	22	30	26
5. Piik	3	7	8	15	6	7
6. Sawén	9	10	8	7	16	14
7. Sawsát	4	6	11	9	34	27
8. Maasané	6	7	12	16	18	15
その他					11	13
Fánniwirh	1					
Wuisusu		1				
サイパン島		2			1	
オレアイ島	3	2			2	
イファリク島	1					
不明						
計	102	89	132	141	262	230
総計	191		273		492	

註 FánniwirhとWuisusuは絶滅したクラン。

図3 Neyáar クランの系譜 (1980年当時)

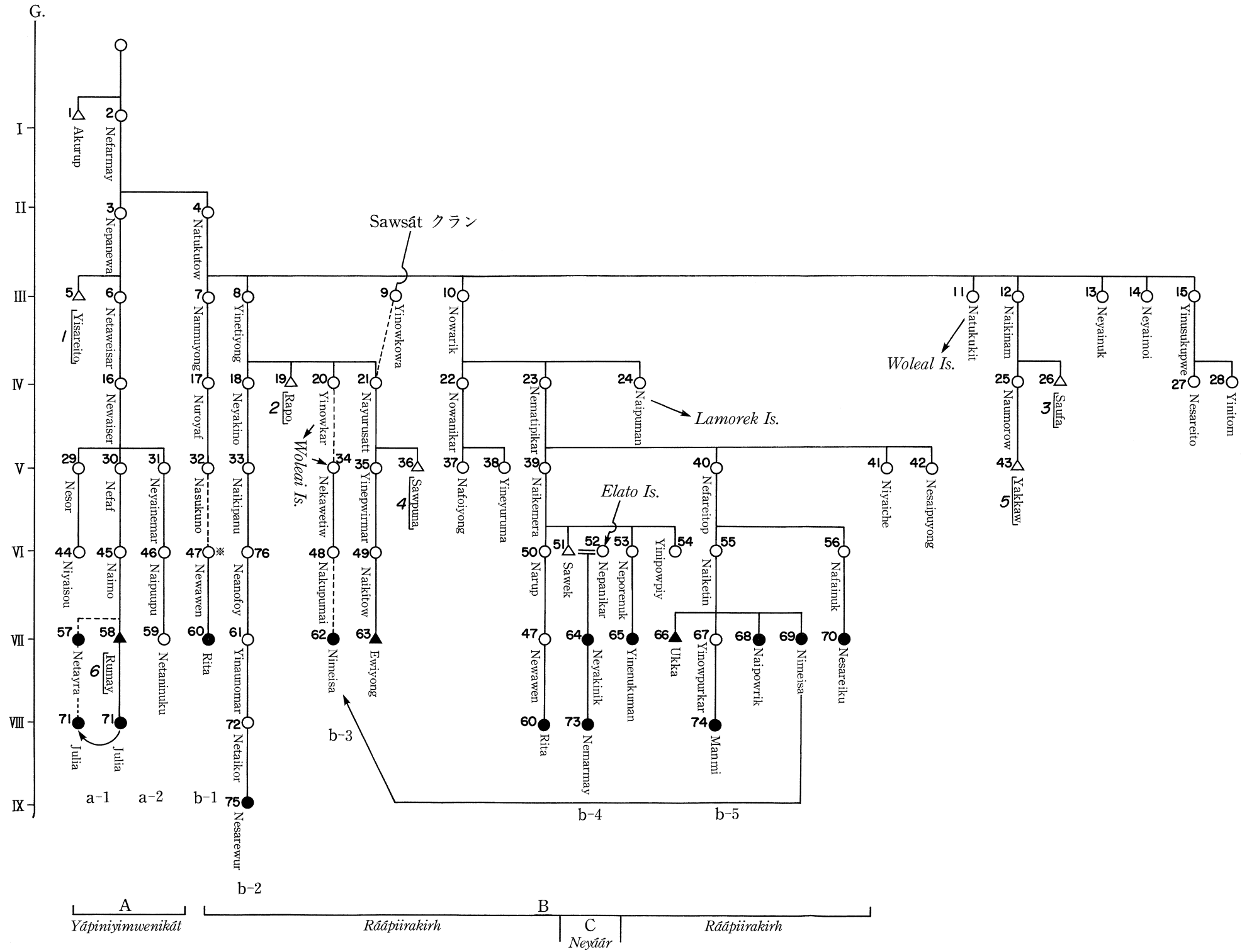


図4 1909年の居住区

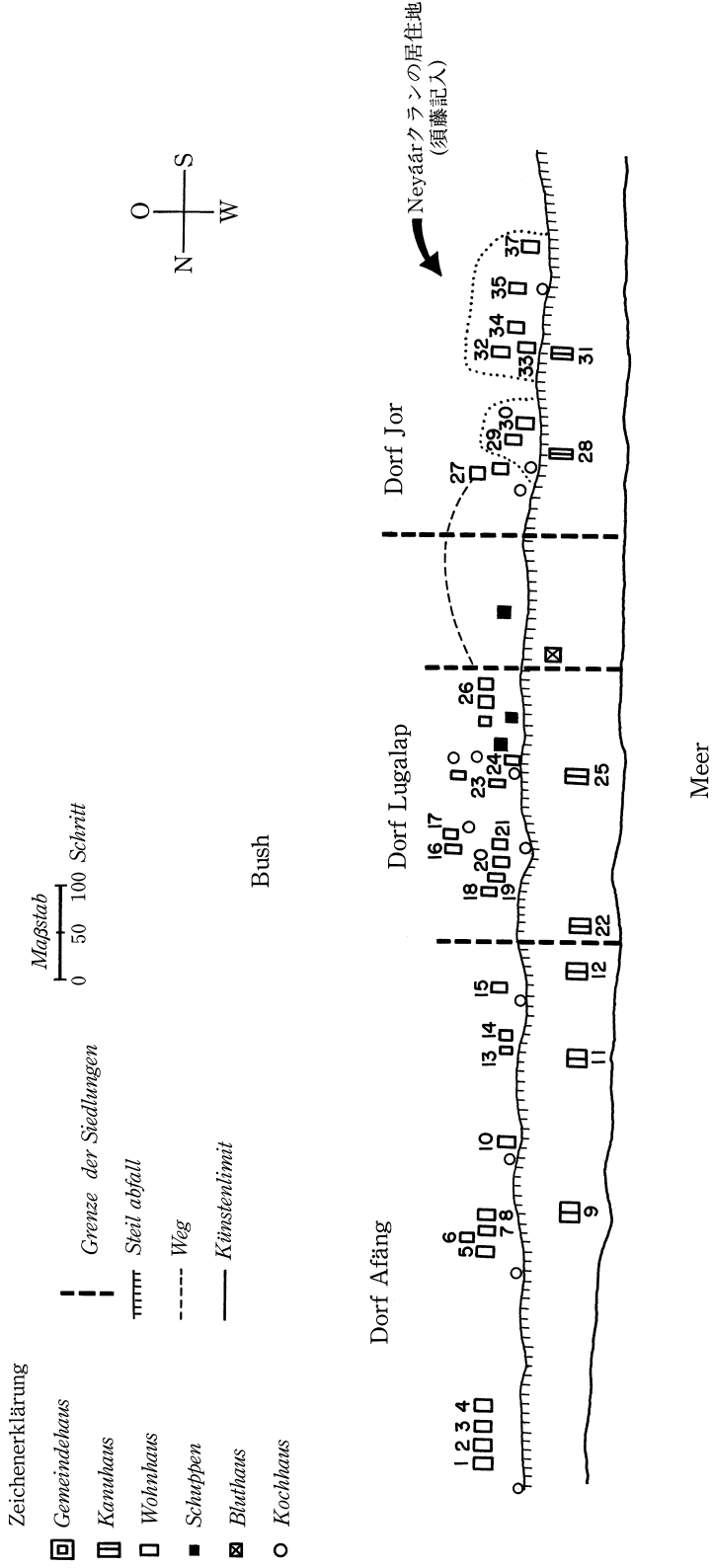


図5 1931年の居住区

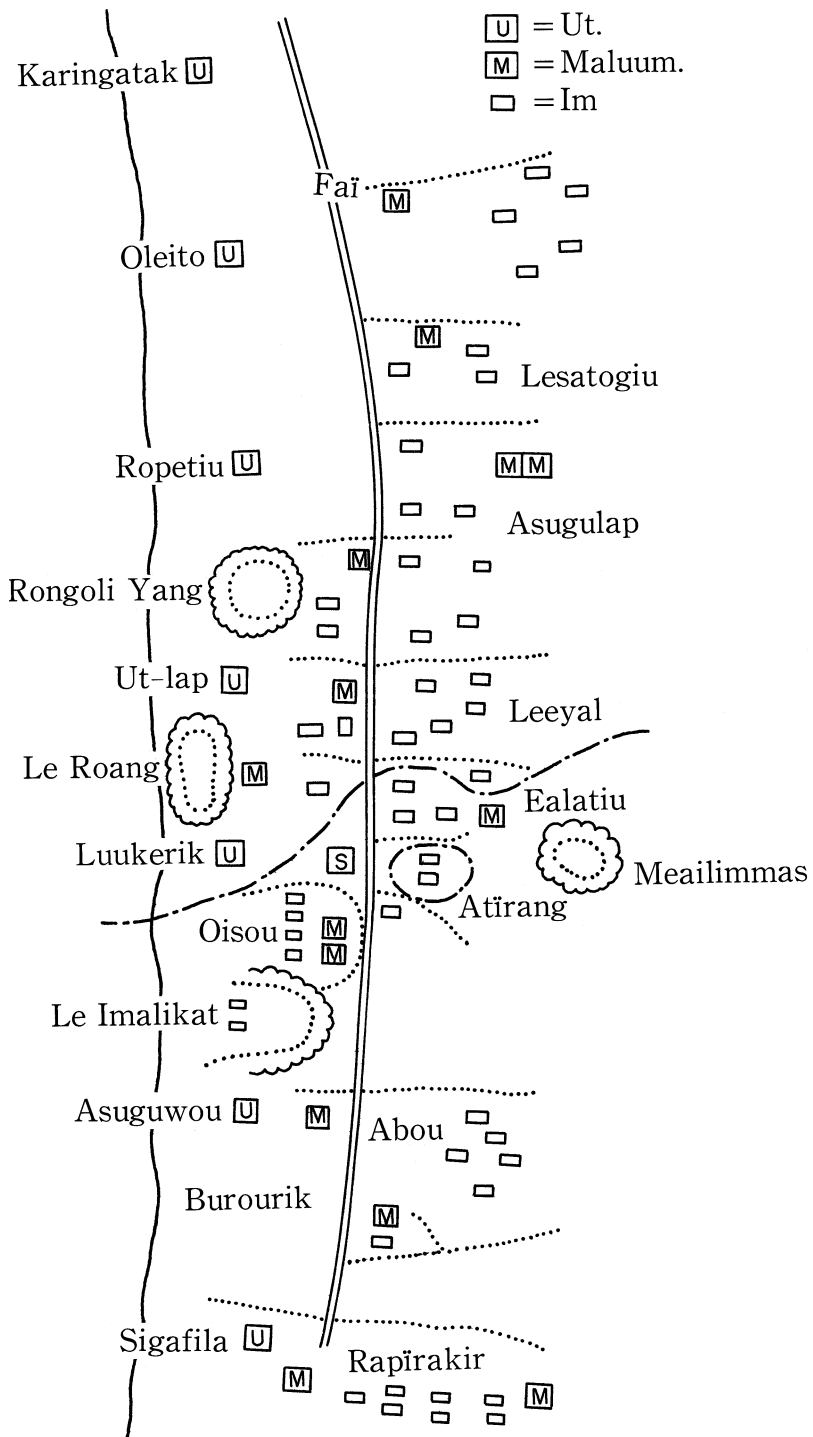


図6 1980年の居住区

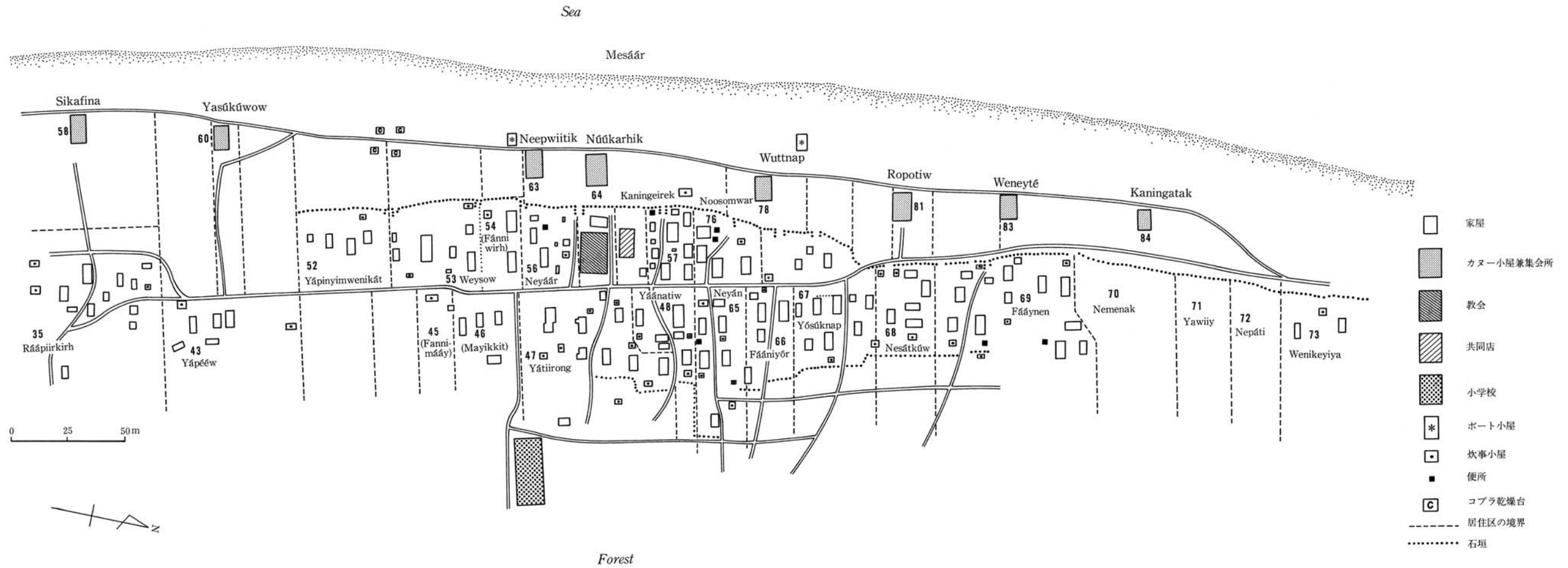
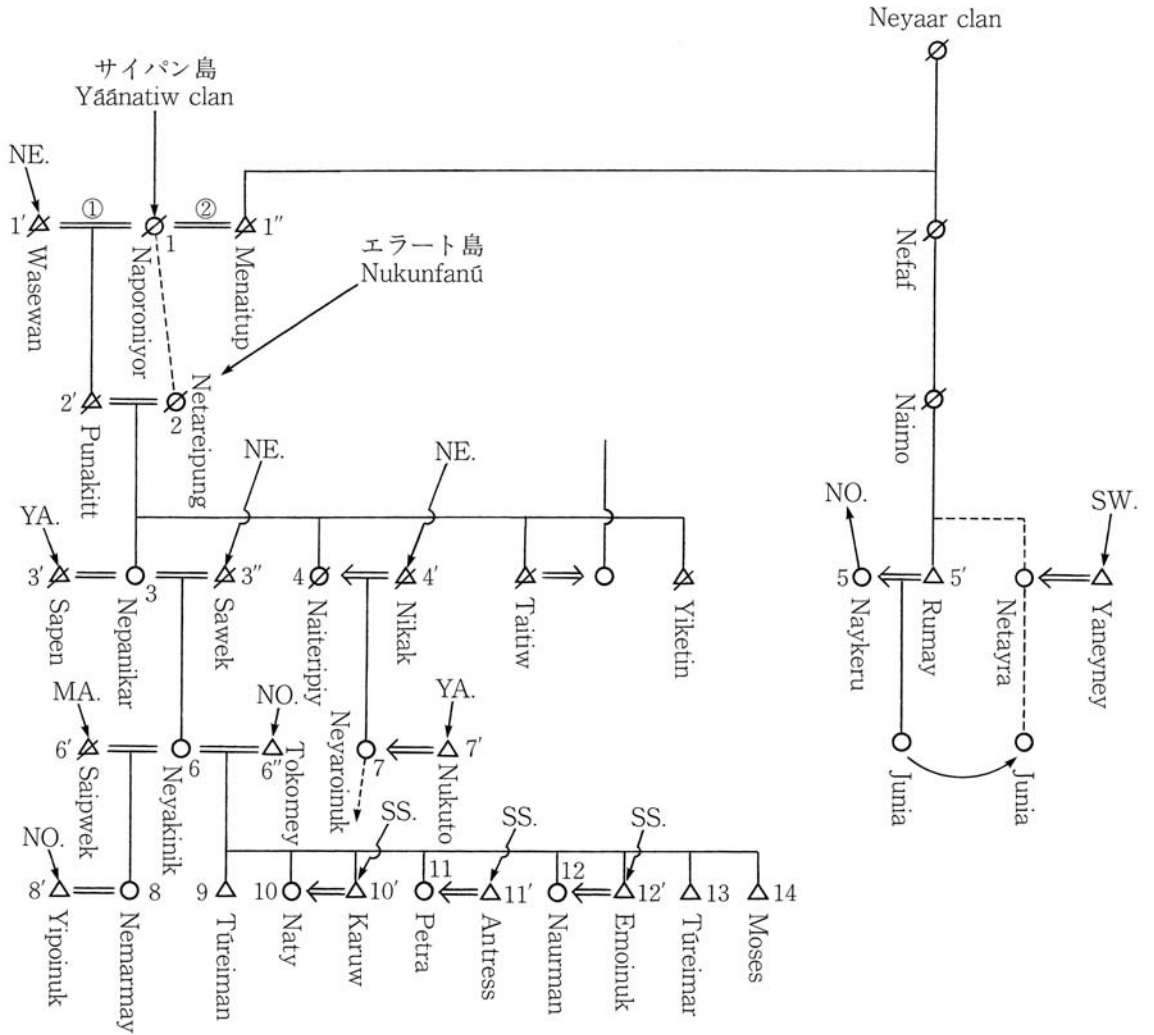


図7 他島出身者のクラン帰属における系譜関係 (1980年当時)



註
 1. △ ∅ は、故人
 2. → 養取先